
今村峯雄先生を送る

坂本 稔

「この結果が受け入れられないとすれば、我々は世界を相手にしなければなりません」

2003年3月、本館で開催された研究会で、先生はこう発言された。炭素14年代法による土器付着物の年代は、弥生時代の開始期が従来の考えよりも500年もさかのぼることを示していた。未だ懐疑的だった出席者を前に、先生は炭素14年代法が世界中で実施されている測定法であることを丁寧に解説され、測定結果に自信を示された。この研究会の成果を踏まえて発表されたのが、同年5月に新聞各紙に掲載された新しい弥生開始年代の考え方である。

今村峯雄先生は、1942年に福井県にお生まれになった。1965年に横浜国立大学工学部を卒業され、1970年に東京大学大学院理学系研究科を修了、理学博士の学位を取得された。博士研究員として米・カリフォルニア大学サンディエゴ校に在籍された後、1972年に東京大学理学部の助手に着任された。1973年、東京大学原子核研究所(当時)の助手に配置替となり、1985年に同助教授に昇任された。1996年、教授として国立歴史民俗博物館情報資料研究部(当時)に迎えられ、1999年からは総合研究大学院大学教授を併任された。2004年、組織改編に伴い本館研究部教授となられ、2008年3月をもって定年退職されることとなった。

原子核研究所時代までの先生のご専門は放射線化学・宇宙線物理学などで、歴史学・考古学とは一見距離があるように思われる。しかしながら先生は、1980年から東京大学原子力研究総合センター(現・東京大学大学院工学系研究科)に設置された加速器質量分析計(AMS装置)の開発に携わってこられた。先生は、日本におけるAMS研究の第一人者でもいらっしゃるのである。本館との関わりという点では、すでに1992年発行の国立歴史民俗博物館研究報告第38集に先生のお名前を拜見することができる。

本館に着任されてからは、自然科学者としてのご自身の実績を背景に、AMSを用いた歴史資料・考古資料の調査・分析に尽力された。何と云ってもAMSによる炭素14年代法(AMS-¹⁴C法)に基づいた高精度年代研究は、先生の最も大きな業績であることは疑いない。

まず1997年から1999年にかけて、佐原真館長(当時)を代表とした科学研究費補助金による研究「ヒノキ・スギなどの年輪年代による炭素14年代の修正」に取り組みされた。炭素14年代法による年代測定では、較正曲線という、年輪年代法で生育年代の判明した樹木年輪の測定値を集めたデータベースによる修正を行う。欧米産樹木に基づいた較正曲線がすでに提案されているものの、それが日本列島の試料に適用できるかについて検討が必要であった。先生は、紀元前後の日本産樹木年輪の炭素14年代が欧米産樹木とほぼ一致することを明らかにし、日本列島でも炭素14年代法による高精度年代測定が可能であることを示された。その成果を受け、2000年に本館で開催された日

本第四紀学会大会シンポジウム「21世紀の年代観—炭素年から暦年へ」では、炭素14年代法による年代研究の推進というアピールが行われている。

次いで先生ご自身が研究代表者となり、1998年から2000年まで文部科学省研究高度化推進研究による研究「縄文時代の高精度編年研究」、ならびに2001年から2003年まで科学研究費補助金による研究「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」を推進され、自然科学的な年代によって日本列島の先史時代を東アジアの中に位置づけることを目指された。土器には加熱調理に伴う内容物のコゲや燃料材のススなどが付着していることがあり、その年代は土器の使用年代にほぼ相当する。土器付着物のような微量試料の年代測定はAMS-¹⁴C法によってはじめて可能になったが、その炭素14年代は型式による土器編年と驚くほど整合していた。弥生時代の開始年代に関する新しい考え方は、これらの研究の過程で明らかになったことである。

引き続き2004年から、本館では学術創成研究としての推薦を受けた科学研究費補助金による研究「弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」を実施中である。先生は研究代表者こそ譲られたものの、炭素14年代法をはじめとする自然科学の研究面で常に中心的な役割を果たされてきた。弥生時代の精密な年代観が明らかになりつつある中、最終年度を待たずしての退職は大変惜しまれる。

先生の視野は先史時代だけではなく、歴史資料の研究にも常に向けられていた。1999年から2002年にかけて実施された本館の基幹研究「歴史資料分析の多角化と総合化」においては総括研究代表者を務められ、2003年から2005年にかけて実施された本館の基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」では、研究代表者として炭素14年代法の歴史時代への応用を実践された。

先生は国立歴史民俗博物館の中であって、「年代学」という新しい研究分野の創設を目指されたように思われる。それは、モノ資料に基づく本館の研究スタイルと合致するものであった。館の内外から年代測定資料に関する情報を幅広く集められ、その検分や採取のために各地の遺跡や埋蔵文化財センター、あるいは寺社などに赴かれることも度々であった。本館の調査室とは別に「年代測定資料実験室」を整備され、年代測定資料の調査・調製を確実にできるような環境を整えられた。AMS装置などの測定装置をあえて導入せず、炭素14年代測定を外部に依頼したことで、年代研究の裾野が自然科学の研究機関にも広がることとなった。総合研究大学院大学教授として学生の指導にもあたり、その実は年代研究による博士号として結ばれた。

年代研究の成果を広く知らしめる方法として、先生はいくつもの企画展示に関わられた。新しい弥生開始年代の考え方を発表した2003年の秋には早速、特別企画「歴史を探るサイエンス」の中で炭素14年代法による年代研究の成果を示された。2007年夏の企画展示「弥生はいつから!?—年代研究の最前線—」では展示プロジェクト代表として奔走され、研究成果という目に見えにくいテーマの展示に苦心された。その一つの方策がギャラリートークであり、先生は2ヶ月の間、毎週日曜日に展示室に立たれたのである。最先端の年代研究を少しでもわかりやすく伝えたいという、先生の熱意の現れといえるだろう。弥生時代の開始年代という最前線の年代研究を示した展示は、夏休み期間ということもあって多くの観覧者を集めたが、会期中に天皇・皇后両陛下の行啓幸、ならび皇太子殿下の行啓を賜ったことは、本館でも前例のないこととして附記しておきたい。

温厚で誠実な先生のお人柄は、本館の良心とも呼べるものであった。調査・研究・教育・展示に忙殺される中、2004年から2年間は研究総主幹として本館教員をまとめあげる任もこなされた。会議などでご自身の意見を主張されることはあまり多くなかったものの、発言されるとなるとその内容は常に広い見地に立ち、知識と経験に裏付けられた確信あるものであった。先生は、研究や運営が決して組織内では完結せず、外部、そして世界との関わりをもって進められることを体現されてきた。私たち後進は先生の拓かれた視野に倣い、それに応えるだけの研鑽を積まなければならない。

本館に在籍された10年あまりの間、先生は知識を貪欲に吸収され、研究者としてのキャリアに歴史学・考古学、そして年代学が加わることになった。自然科学と人文科学、そのいずれにも造詣の深い研究者はさほど多くはないと思われる。これからはより自由な立場で、一層の研究活動に邁進されることであろう。

(国立歴史民俗博物館研究部情報資料研究系)